

# 白銀の刀剣

雪宮春夏

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日、米花小学校の一年生、江戸川コナン達のクラスに、一人の転校生がやって来た。

その名前は「黒田鶴丸」。

直ぐさま少年探偵団に誘った小嶋元太、円谷光彦、吉田歩美の三人に、彼は己が親戚の相手の住居に居候している身である事を告げる。

現在毛利探偵事務所に居候しているコナンと同じ立場であると、盛り上がる彼らに対して、鶴丸が語る居候先の相手とは……。

目次

# 1	転校生	1
# 2	安室透	5
# 3	黒田 鶴丸	8

## #1 転校生

「黒田鶴丸だ！ 姓名合わせれば黒白モノクロだが、俺としては鶴の名に因んで紅白の組み合わせが好きだな！ こんな形でなんだが宜しく頼む！！」

にかつと擬態語が付くほどの笑みで言い放つその姿は一見年相応の普通の子どもに見えたが、他の子供達と同じようにその姿を見ていた少年……江戸川コナンはそこに違和感を覚えてしまった。

具体的な根拠こそ無いが、長い間探偵として、多くの事件に関わってきた事によって育まれた第六感と呼ぶべきそれが、彼に酷く訴えたのだ。

その底抜けなまでの明るさの中に、何かが隠されていると。

語られた側も納得するほど、転校生、黒田鶴丸の姿はどこか浮き世離れしたものだ。た。

「彼……どう見てもアルビノね。最も彼本人は厭うどころかそれを前面に押し出す事で楽しんでるようだけけど」

隣席からそう語りかける少女、灰原哀に思わず頷いてしまったのも、無理からぬ事だろう。

白い髪に透き通るような雪のような白い肌。

その姿に合わせるように服装も白一色で合わせていて、彼か好むと語っていた赤の要素はどこにもない。

稀にウサギのような小動物で見られるアルビノの個体ならば血管が浮き出ることにより、瞳は赤くなるはずだが、彼の瞳は蜂蜜のような鮮やかな金色だった。

（日本人離れた容姿だよな。姓名からして日本人なんだろうが、灰原以上に外国の血が強くでてるみてえだし……こりやあ大変だったんじゃないかな）

季節外れの転校に些か訝しんではいたのだが、彼の姿を見て、コナンは密かに納得していた。

母親がイギリスの血を引くという灰原は、赤茶色に近い茶髪の髪をしている。

外国の血が入っているという理由で、幼少期は虐められていたも以前言っていた。

これは完全な推測だが、もしかしたら彼もそんな過去があるのかもしれない。

(いや、でもそれだって、髪を染めるなり何なりと、方法はあるかもしれねえが……)

もしや躊躇したのだろうか。

たとえそうだとしても、親の気持ちも分かりそうなものだろう。

それほどまでに、その髪はもし天然物なのだとしたら、見事としか言いようのない色艶があった。

少年、江戸川コナンがそのような思考に至っていたなど気づく様子も無さそうに、目の前の少年、黒田鶴丸と名乗った彼は久々の転校生に対する強い好奇心から、己へ寄ってくる子供達の対応に追われていた。

それはあたかも、砂糖に群がる蟻もかくやというものだろう。

そしてそれは、コナンと親しくしている彼と近しい三人の子供達、少年探偵団も例外ではない。

寧ろ、灰原哀以来の転校生の存在に、彼らが次にとるであろう行動はコナンには手に取るように分かった。

「……つつう訳ですよ！ 鶴丸っ！ お前も少年探偵団に入らねえか!?!」

(何が「つつう訳」だよ?)

「入りましょう!?! 鶴さん!!」

「きつと楽しいよっ」

団長、小嶋元太の一言をきっかけに、円谷光彦、吉田歩美も声を上げる。

自分の席からそれを眺めていたコナンは心中でツツコミを入れるが、当然心の声など届く筈も無い。

同じく少年探偵団に入っているとされる最後の一人、灰原哀は、チラリとこちらを見やるが遠巻きにしていると云った所だ。

「少年探偵団?」

聞き慣れない単語に首を傾げてみせる鶴丸に、彼らが口々にレクチャーを始める。

それをふんふんと頷きながら聞いていた彼は、しかし暫く後に困ったように眉を寄せた。

「面白そうな嘶だがなあ……俺はこの町では、親戚の相手に居候させて貰っている身の上なんだ……。彼の許可無く、一人で決断は難しいな」

申し訳なさそうに謝る鶴丸であるが、その程度で気落ちするほどの三人は繊細では無かった。

寧ろ新しく手に入れた鶴丸の個人情報で更に盛り上がる始末だ。

「居候ですか！　まるでコナン君みたいですね!!」

「……コナン、君?」

自分達とは違う環境に光彦が目を輝かせると、特殊な立場と思っていた環境にいる子どもが己以外に驚いたのか、鶴丸は目を瞬いた。

歩美に示され、苦笑しながらも改めて……三人が自己紹介した時は口を挟む間もなく流されたのだ。自己紹介となった。

「僕も毛利探偵事務所って言う所に居候してるんだ。君はどこに住んでいるの?」

次いで探るようにつめてしまうのは探偵としての性だろうか。

コナンや灰原のように他の子供達とは異なる雰囲気を感じたのも、その行動を後押ししてしまったのかもしれない。

しかし子どもはコナンのその探るような視線には気付いていないのか、サラリと情報を開示した。

「俺の居候先はそんな大層なところでは無いぞ?どこにでもある住宅街の中の一アパートだ。……最も、朝家から出るときに、まだ道順が完全に覚えているかが不安だと漏らしたから、今日はその親戚の相手と落ち合う事になっているんだが……」

この後、相手の職場まで行くことになっているんだが、良ければ一緒に行くかい?

そう続けられた言葉に、ただでさえ鶴丸に興味津々な彼らは遠慮な

どみせない。

既に少年探偵団に興味を示している鶴丸がその相手の許可がなければ入団の有無を決められないと言っているのだから尚更だ。

居候している鶴丸と共に、相手の職場まで押しかけようと話を纏めかけている三人に、慌てたのは良識と言える常識を持つ、コナンと灰原だった。

鶴丸は同居している親戚の子供ということで、事前に相手も自分の職場に話を通していいのかもしいれないが、三人は完全に想定外な筈だ。

場所によっては怪しまれるかもしれないし、どこかも聞かずに進めて良い話では無い。

ここは今日は一度保留にして、明日にでも改めて返答を得れば良いと提案しようとしたのだが……それは鶴丸によつて覆される事になる。

「別に良いと思うぞ？ 相手の話じゃあ、そこまでお堅い場所でも無いと言っていたし」

何よりと、続けた次の言葉でコナンは驚愕に目を見開く事となる。

「俺もまだこの町に詳しくないからなあ……喫茶「ポアロ」と言う名前だけじゃあ、たどり着ける自信が無いんだ」

良ければ案内をしてくれないかと、向けられた視線は、柔らかいまま、三人の方へと向けられている筈だった。

しかし、コナンの直感は何らかの警戒を促すように、じつとりと怖気を走らせていた。

## #2 安室透

「親戚の特徴か？ ……その「ポアロ」って、喫茶店で働いている、俺とは正反対の色黒の男さ」

軽い調子で続けられた言葉に、コナンと灰原は息を？んでいた。

一方、事情を知らない子供達は、わつと、はしゃぎ始める。

「それって安室さん!？」

「え？ ……でもよ、安室の兄ちゃんとか鶴丸じゃあ、肌の色違えぞ？」

「それはついさつき鶴さん本人が言っていましたよ？ 元太君。後目の色も違いますよね？」

遠慮無く、友達となった子供とその親戚だという男との間にある差違を三人が交互にあげていくも、鶴丸は全く気にしていない様子で、だよなあと笑った。

「基本的に俺は父親似なのさ。「安室さん」は母の弟さんでな？ だから父方の姓である俺とは姓……名字が異なるんだ。生後間もない頃はあの人よりも更に薄い金の髪だったらしいが、何がどうなったのかこんな形になっているな」

つらつらと並べられる言葉に三人は納得しているようだったが、コナンにはその真偽は分からない。

なぜなら、コナンは知っているからだ。

喫茶「ポアロ」の店員……「安室透」。

私立探偵で、毛利探偵事務所所長、毛利小五郎の弟子となった彼は、コナンと灰原の体を小さくした毒薬、アポトキシン4869を灰原と化した少女、「宮野志保」に作らせた、通称「黒の組織」……若しくは「黒尽くめ」と称される、正体不明の犯罪組織の一員なのだ。

組織の中では、「探り屋」と言われるほど情報収集に特化した実力を持つ彼に与えられたコードネームは「バーボン」。

少し前はコナンの立案した作戦によって、身内にさえ死を偽装しているFBI捜査官……組織からは、「銀の銃弾シルバーブレット」と呼ばれ恐れられる男、赤井秀一の死の確認をしているような行動をとっていた様だが、つい数日前のミステリー・トレインでは、一時的に怪盗キッドが変装



していた姿とはいえ、灰原……大人の姿であったので、宮野志保と言うべきであろう彼女を殺すために、拳銃を向けた過去がある。

結果としては前述の通り、そこに仕事の下見として訪れていた怪盗キッドを始め、コナンの元の姿である高校生探偵、工藤新一の実母、工藤有希子他、協力者達の活躍により、灰原自身に危害を加えられることも無く、「バーボン」の正体を掴むことも出来たのだが。

（おっちゃん達にはバレていないとは言え、堂々と関係を持ち続ける事は俺にとっても予想外だったな……）

ミステリートレインにおいても、作戦の主軸を担っていたコナンも、その協力者にして、灰原哀の現在の保護者となっている阿笠博士も、組織の人間であると露見した以上、安室透は、この町から姿を消すと思っていたのだ。

しかし現実として、数日ポアロを休みはしたものの、それ以降は以前と変わらぬ形でポアロにシフトを入れ、その上層階にある毛利探偵事務所にも顔を出している。

その堂々とした様子はこちらが気づいていると言う事を知っているかどうかという判断までも惑わせている。

そんな中に現れた転校生……彼の親戚を名乗る鶴丸に、余計に勘ぐるなど言われる方が難しかった。

（組織の構成員にしちゃあ、若過ぎるが、まさか、本当に親戚を預かっているとは考えにくい……絶対なんかある筈だ……）

知らず知らずのうちじつと鶴丸に、視線を向けているが、鶴丸が気にする様子は無い。

気にしていないのか、気が付かないのか。

「ええっ!? 哀ちゃん、ポアロに行かないの?」

どうやらコナンが思考に沈んでいる間に、鶴丸と共にポアロへ行くことが三人の子供達の間では本格的に決まってしまったらしい。

それを一人、灰原は断っていた。

「ええ。ぶっめんなさい。博士に呼ばれていたこと、すっかり忘れていたの」

眉根を下げながら謝る灰原に、歩美もしかたないと意気消沈した様

子で呟く。

しかし直ぐさま、気を取り直すように、また明日と言えるのは子どもの特権だろうか。

「ではまたな。……あい、ちゃん？」

「灰原よ」

下の名前で呼び、首を傾げた鶴丸は、おそらく呼び方に迷ったのだろう。

それにツンケンドンと言い放つ灰原は、組織の一員と何らかの関係があるかもしれないと言う疑惑も相成って、素っ気なさに磨きがかかっていた。

最後にチラリとこちらを見つめる灰原を、安心させるようにコナンは頷いてやる。

具体的な策は何もないが、何らかの手を打たなければならぬだろう。

仮に鶴丸が探偵団の一員になれば、博士の家同様、子供達がポアロをたまり場にしてしまう可能性がある。

ミステリートレイン以前から、バーボンである安室は、宮野志保……コードネーム「シェリー」の顔を知っているのだ。

彼女の顔は、大人になっても殆ど変わっていない。

幼少期から組織にいたこともあり、調べようと思えば直ぐさま気付かれてしまうだろう。

(……いや、まさか、もうきづかれてんのか?)

ふと、コナンの中に強い危機感が芽生えた。

鶴丸が最後の大詰め……証拠を集めるために距離を縮める為の策だと考えれば、いきなりの転校生は、納得がいくのかもしれないのだ。

(……いや、決めつけるのは早計だ……俺がバレるわけにも行かねえ……取りあえず、今は様子を見るつきやねえ……)

ひとまずは、バーボン……安室さんと対峙する必要もあるだろう。

後は……。

(「赤井さん」にも……一言、伝えねえとな)

やることは多かった。

### #3 黒田 鶴丸

軽快な音が店内に鳴り渡り、来客の訪れを知った店員、榎本梓は、その音の発信場所となった扉に目をやり、目を丸くした。

「……すまんが、ここがポア口であっているんだよね？」

何も言葉を発さない梓に、居心地の悪さを覚えさせてしまったのか、その場に佇む男の子が、チラリと後ろに目をやった。その視線を辿ると、彼の後ろから見守るように、梓にとっても見知った子供達が並んでいた。

「あー、ごめんね？ 大丈夫。ここがポア口だよ？ 黒田鶴丸君……であっている、よね？」

見た目は、同じくここ、喫茶ポア口の店員である、同僚、安室透から聞いていたが、彼と同じく、しかし方向性のまるで違う整った顔立ちに、思わず固まってしまった己を恥ずかしく思った。

安室の話では、彼は安室の姉の息子であり、父親の都合で少しばかり治安の悪い国へ行かなければならなかったため、大事をとって、幼い鶴丸は安室のところへ預けたのだという。

梓と対峙した彼の方も梓の特徴を安室から聞いていたのか、人懐っこい笑みを浮かべて澆刺と言葉を返してくる。

「いかにも。黒田鶴丸だ。透殿から話は通っていると思うが、しばらくはここにも世話をかけるだろう。宜しく頼む」

古めかしさの残る仰々しい口調と言い、ぺこりと頭を下げて口角を上げる仕草と言い、どこか年齢にそぐわない大人のような雰囲気を感じるが、生家が躰に厳しい環境なのだろうかと思いを巡らせる。

年頃になれば叔父である安室に負けず劣らずの好青年になりそうな片鱗は、間違いなく現れていた。

思わず彼の将来に思考を向けていた梓は、次いで聞こえてきた聞き慣れた子供達の声に、ようやく我に返った。

「あっ！ コナン君、元太君、光彦君、歩美ちゃんも!!」

特にコナンは、ここ、喫茶ポア口の上階に住む、毛利家に居候している身の上であるために、梓にとっても見慣れた存在と言えた。

また、コナンと共に少年探偵団を名乗る彼らにも、何度かコナンを通じて関わったこともあり、梓にとっては気安く話せる小さな常連さん達であった。

「そっかあ……鶴丸君を探偵団に……それで、安室さんに聞きに来たのね」

事情を聞いて納得した梓は自分も協力しようと胸を張る。

それに強力な味方を得たと盛り上がる子供達を眺めながら、コナンはチラリと鶴丸に視線を投げた。

今し方までは子供達と共に笑い合っていた鶴丸は、梓が彼らと同調した直後に、ごく自然な様子で、彼らから一步後ろに下がっていた。

それは、物理的な距離か、もしくは精神的な距離か。

今喋る彼らを見つめるその瞳は、どこか子どもを見守る年長者のものに似ている気がする。

「……どうした？」

極力、視線を抑えるようにはしていたはずだった。

そうでなくても、実年齢が十に満たない子供の注意力で気づかれる程の拙いやり方ではない。

それにも関わらず、鶴丸は迷いのない様子でまっすぐにこちらへ視線を向けた。

「……え？ 何が？」

咄嗟に子どもらしい反応を示してみるが、それに対する彼の反応は読み取りにくい。

彼が見た目通りの幼い子どもに過ぎないのならば、年は自分の方がずっと上な筈なのに、まるで幼い子供が見栄を張る様を眺めているような、呆れが混じった諦観を、彼は浮かべていた。

「まあ、言いたくなければ良いさ」

まるで全てを分かっていると言うかのように。

「やあ、おかえり。鶴丸君」

二人の間に密かに流れた沈黙を破ったのは、バックヤードから出てきた彼の保護者、黒の組織の一員でもあるバーボンこと、安室透その人だった。

「あつ！ 安室さん！」

こんにちはと、声を揃えた子供達に笑顔で対応する様子は、子供好きで面倒見の良い好青年にしか見えないだろう。

鶴丸自身が興味を持ち、具体的な障壁は彼だけだからか、コナンが口を挟むでも無く、順々に鶴丸に付いてくる形でここへ訪れた訳を説明する子供達に、安室は少しばかり考えるような形をとったが、その答は既に決まっていたようだ。

常に浮かべる人に好かれる笑みを浮かべて、構わないよと笑いかけている。

「やったあ！」

「良かったですね!! 鶴さんっ!!」

喜び笑いかける子供達とは異なり、微かな苦笑を零す鶴丸は、彼等の高すぎる調子に順応仕切れていないらしい。

ちょうどシフトの時間が終わったという彼に連れ立つように、鶴丸は別れを切り出していった。

残念がる子供達に対して、引越してきたばかりで荷物の整理が終わっていないからと言葉を並べる鶴丸に、コナンの視線が注がれている。

あからさまなものではない為、バレはしないと思っっているのか、バレても構わないのか、その姿は端から見ると悪目立ちしている。

(……若しくは、その事実気付かないほど余裕が無いのか)

どちらだろうかと、頭の片隅で考えながら、鶴丸は安室と連れだつて歩いて行く。

「……どうだった？ 初めての小学校は」

幾つかの世間話と共に切り出された本題に、僅かな思慮と共に、なかなか面白いぞと、返した。

「君といい、あの子達といい……この町には随分、まともに名を名乗れない訳が多いがなあ」

「……それは君もだろうか？」

間髪入れずに放たれた正論に、苦笑をもって返答に変えた。